

だんだんほっち



だんだらぼっちは、たびたび

だいおうじまから ちかくの むらに

やってきました。

ドッスン、ドッスン。

とても おおきな おとこですから、

あるくたびに やねが おちたり、

たんぼや はたけが つぶれたりしました。

また、こめを くらごと もっていたり、

りょうしが とった さかなを

ふねごと もっていたりしました。

むらの ひとたちは

とても こまっていました。





大王丸

あるひ、むらのひとたちがあつまって、  
どうしたらよいか、そうだんしました。

(むらびと1)「おおきなあなをほって、

そこにおとしたら、どうだろうか？」

(むらびと2)「そんなおおきなあな、

どうやってほるの？」

おとしたあと、どうするの?。」

(むらびと3)「ああ、このままではこのむらに

すめなくなってしまうぞ。」

なかなかいいかんがえが、でませんでした。





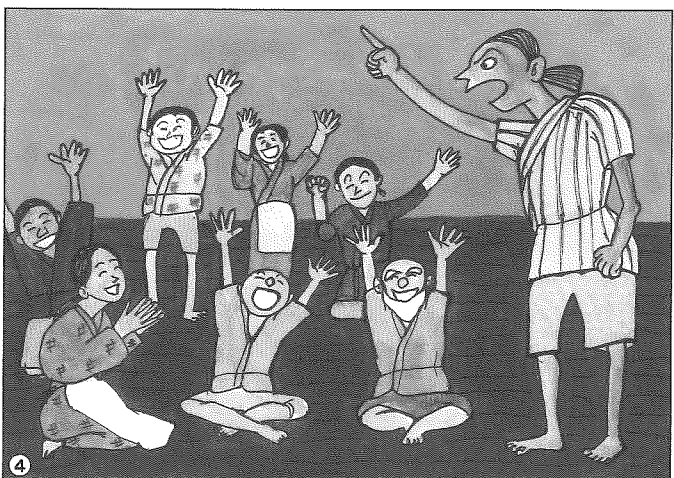
しばらくすると、ある おとこが いました。

(おとこ)「いい ほうほうを おもいついたぞ。

それには みんなの ちからが ひつようだ。」

おとこの はなしを きいて、

さっそく みんなで やってみることにしました。





ある はれたひ、だんだらぼっちが

いつものように むらに やってきました。

ドッスン、ドッスン。

むらの なかを あるいていると、

みちの まんなかに

おおきな たけの かごが ありました。

(だんだらぼっち)「これは なにに つかうんだ?」

すると、むらの こどもたちが いいました。

(こども1)「これは、せんにんりきの おとこの

べんとうばこだよ。きのうの ばん

ここに きて、わすれていったんだ。」

(だんだらぼっち)「なにっ!? せんにんりきだと? ここには

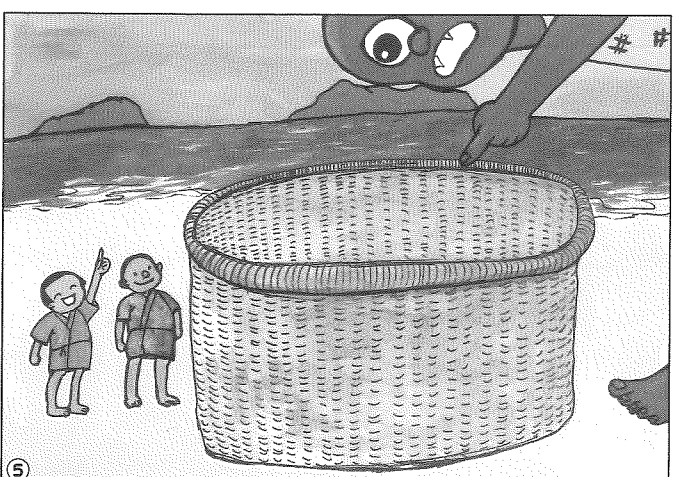
そんなに つよいやつが くるのか?」

(こども2)「おまえより ずっと おおきくて つよいぞ。」

だんだらぼっちは とても おどろいて、

ひとつめで まわりを みなから

あるいていきました。







すこし いくと、むらの おんなたちが  
あつまっていました。

おんなたちは、さかなを とる あみを  
たくさん つなげて めっていました。

(だんだらぼっち) 「これは なんだ?」

だんだらぼっちが たずねると、

(おんな) 「これは せんにんりきの おとこの

きものです。あなが あいたので、  
なおしてくれと いわれたんです。」

と おんなが こたえました。

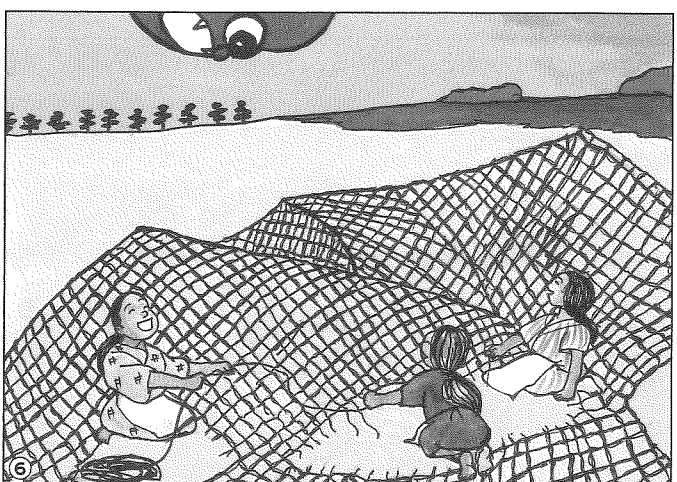
(だんだらぼっち) 「なんだと!? そいつは そんなに

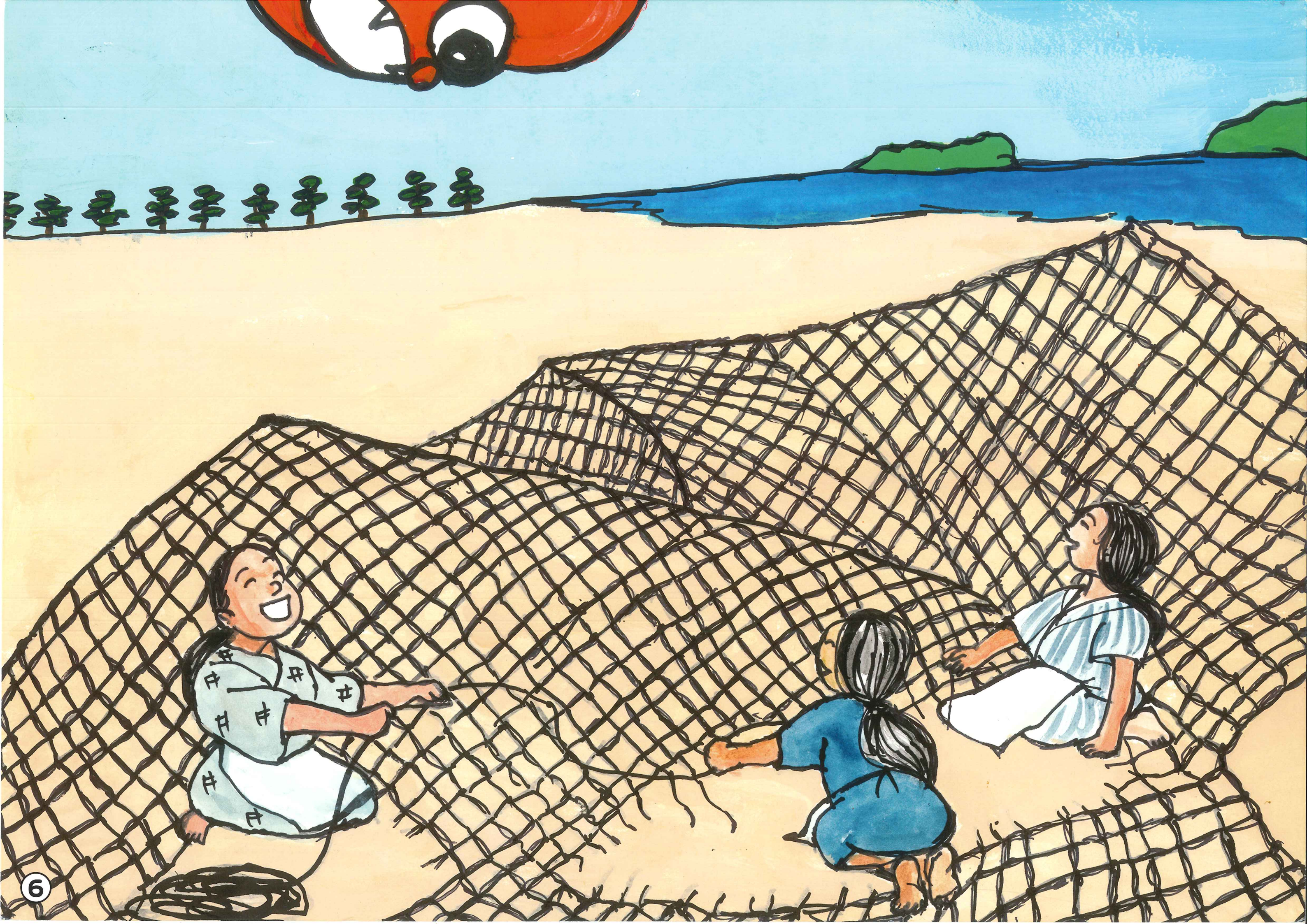
おおきいのか!」

だんだらぼっちは すっかり こわくなって、

はまべの ほうへ はしっていきました。

ドスン、ドスン、ドスン、ドスン。





はまべでは、むらじゅうのおとこたちが

とてつもなく おおきな わらじを はこんでいました。

(だんだらぼっち)「こ、これは、いったい なんなんだ?」

だんだらぼっちは かおを あおくして ききました。

(おとこ) 「みてのとおり、わらじだ。

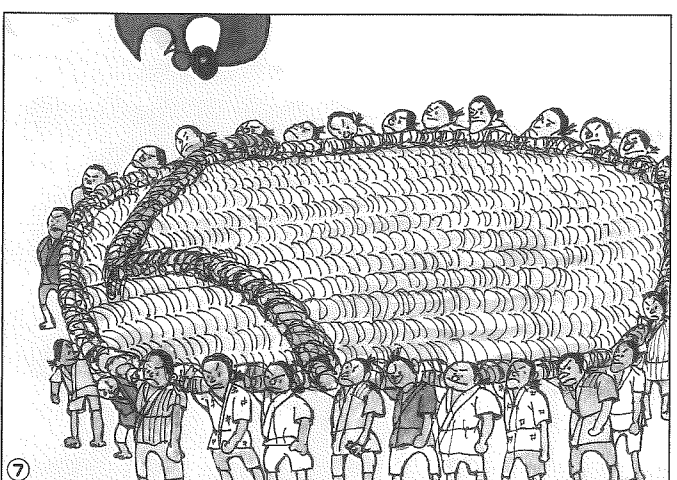
もうすぐ せんにんりきの おとこが

やってきて、あたらしい わらじに

はきかえるんだ。」

(だんだらぼっち)「わ、わ、わらじ……!!」

だんだらぼっちは ふるえながら さげびました。





(だんだらぼっち)「そ、そんな やつが

もうすぐ くるだと!?

たいへんだ。こんな おおきな

わらじを はく おおところには

かなわない。たすけてくれ!!」

だんだらぼっちは あわてて だいおうじまへ  
にげていきました。

ドスン、ドスン、ドスン、

ドスン、ドスン、ドスン。

それから、だんだらぼっちは

むらに こなくなりました。

でも、だんだらぼっちが にどと こないように、

いまでも おおきな わらじを

うみに ながしているんですって。

おしまい。





このむらは、みえけん しまし だいおうちょうの

“なきり”という ところに あります。

なきりでは、まいとし 9がつに

“わらじまつり”が おこなわれています。





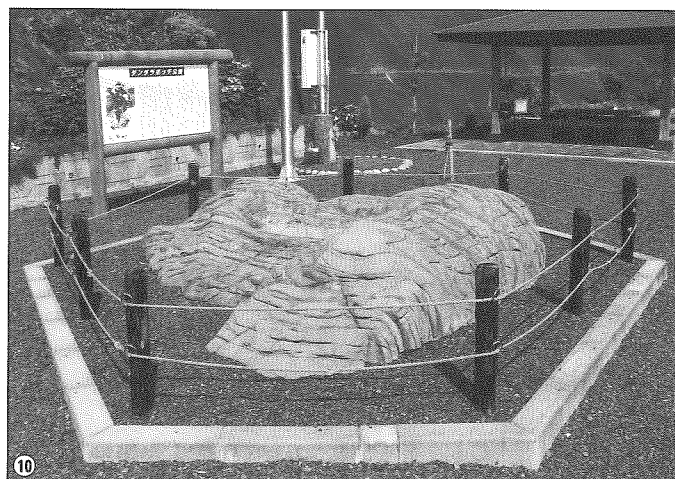


なきりには

ダン<sup>だ</sup>ン<sup>ん</sup>ダ<sup>だ</sup>ラ<sup>ら</sup>ボ<sup>ぼ</sup>ツ<sup>っ</sup>チ<sup>ち</sup>こうえん<sup>ち</sup>が あります。

これは だんだらぼっちの あしあとを

ちいさく つくったものです。



ダンダラボッチ公園



ダンダラボッチ公園  
この公園は、ダンダラボッチの  
誕生の地として、多くの  
観光客が訪れる。公園内には、  
ダンダラボッチの像や、  
その誕生の歴史を  
紹介するパネルが  
設置されている。

— 多言語で楽しむ三重のおはなし —

## だんだらぼっち

2017年2月 初版第1刷発行

企画・発行 公益財団法人 三重県国際交流財団  
〒514-0009 三重県津市羽所町 700  
TEL 059(223)5006 / FAX 059(223)5007  
<http://www.mief.or.jp/>

印刷・製本 伊藤印刷株式会社  
〒514-0027 三重県津市大門 32-13  
TEL 059(226)2545 / FAX 059(223)2862  
<http://www.ztv.ne.jp/ito-pt/>

この教材は、一般財団法人自治体国際化協会の助成事業により制作されました。

11

そして、しましの わぐぐとらう ところには、

“おしま”と “ごしま”とらう

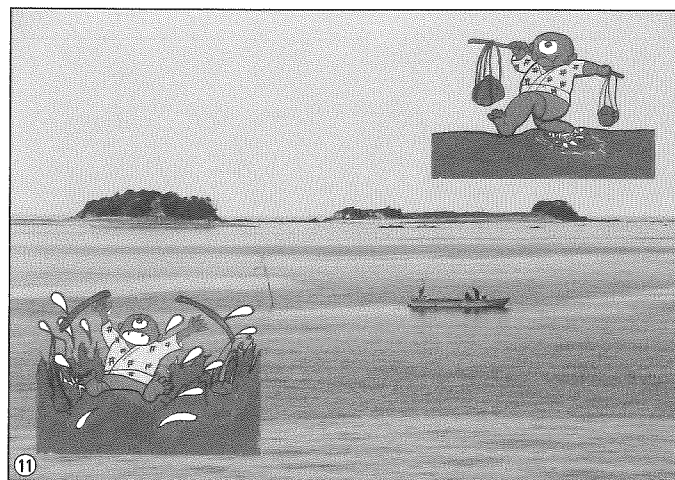
2つの しまが あります。

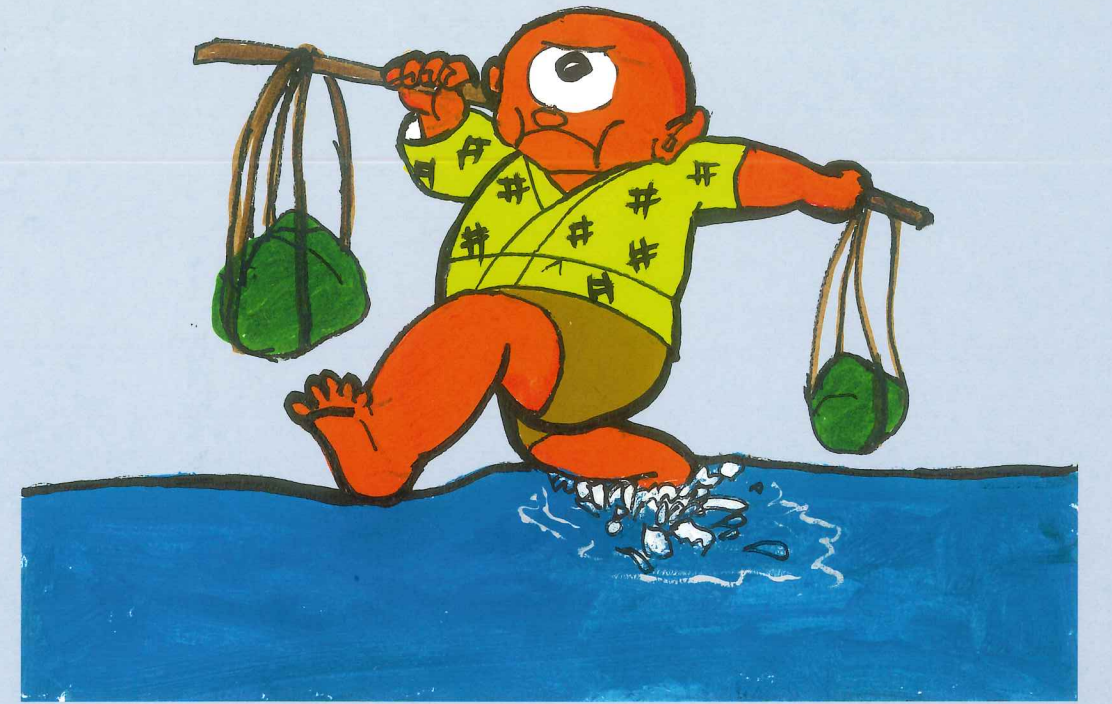
これは、だんだらぼっちが ぼうに のせて、

とおくから はこんできた といわれています。

とちゅうで ぼうが おれてしまって、

ここに おいていったそうです。





# だんだらぼっち

脚本 外国につながる親子のためのおはなし教材制作委員会

画 川西みどり

写真 「伊勢志摩きらり千選」より引用

企画・発行 公益財団法人三重県国際交流財団

1

むかしむかし、

“だいおうじま”という しまに

“だんだらぼっち”という ひとつめの

おおおとこが すんでいました。

だんだらぼっちは とても おおきくて、

あたまが くもに

とどきそうなくらいでした。

どっすん、どっすん、  
ドッスン、ドッスン。

だんだらぼっちが あるくと、

そのおもさで いわが うみの そこに

しずんでしまうほどでした。

